

ホンモロコの種苗生産

水産科3年 阿部雄太，菊池弘樹，田中勝宏

1. はじめに

ホンモロコは、琵琶湖に住むコイ科コイ目バルブス科タモロコ属の魚で、コイ科の魚では最も美味しい魚とされています。(写真1)

実習場周りの水路にいるタモロコとの違いは少し下あごが出ているところです。タモロコの口は底にたまった泥の中から餌を獲りやすいよう下を向いています。ホンモロコは湖で水面や水中のプランクトンを捕獲するため上を向いているのではないかと思います。

ホンモロコの資源減少は産卵場所となる藻場の減少、ブラックバス、ブルーギルの増加による食害によって減少しています。また、春先の産卵期に人為的に急激な水位の低下により卵が死んでしまうことによっても減少しています。

天然物の漁獲状況は1994年までは年間200トンありましたが、2007年には7トンまで減少しています。現状としては絶望的な状況であると考えられます。

天然資源の減少から養殖が注目されています。埼玉県が多くの業者があり、生産量も多く、地元でもモツゴに替わる魚として定着しています。養殖の方法は比較的簡単で、コメの減反による休耕地の活用、魚価の高い高級魚であることから全国各地で養殖が盛んになってきています。



(写真1) ホンモロコ

2. 研究の目的

私たちは、全国的に広まりつつあるホンモロコを種苗生産してみようという目的で、この研究を始めました。また、休耕地が多い那珂川町にも何か貢献できるような結果が残せればいいなという期待を持って取り組みました。

3. 研究の方法

- (1) 親魚を購入
- (2) 親魚をグリーンウォーターで飼育
- (3) 養殖池にキンラン（人工産卵藻）を入れて採卵、採卵した卵の観察
- (4) ふ化したホンモロコを畜養し、観察
- (5) 試食

4. 考察

ホンモロコの養殖においては、より効率的な養殖方法を確立していく事が今後の課題になります。

今回は採卵の段階で大きなロスがあったように思えます。要因の一つとして、ホンモロコは水面ギリギリに産卵するので、キンランの沈んだ部分にはあまり卵が付着していなかったことが卵の少なかった原因だと思います。そこで、他県の水産試験場のホンモロコの採卵方法を調べた結果、埼玉県とホンモロコの地元滋賀県の採卵方法がありました。埼玉県の試験場では、魚が乗れるような幅の広いキンランを使用していました。(写真2) 滋賀県の試験場では、キンランと塩ビのパイプをつないだものが使用されていました。(写真3) どちらかの方法を参考にして来年度は効率のよい採卵ができると思います。

5. まとめ

那珂川町は休耕地が県内でも多い地域ということで、より効率的な養殖方法の確立と、休耕地利用の可能性を広げる方法の確立を考えていきたいと思います。校舎には使っていない池があります。そこで水を張って植木鉢でマコモダケを栽培しながら、粗放的なホンモロコの栽培ができるのではないかと期待しています。マコモダケは、現在那珂川町が休耕地を活用していく作物として広めようとしているイネ科の植物です。その他、養殖池の面積、水深からその生産量、生産額の目安を立てられるようなデータを取っていくべきだと思います。

私たちの研究をもとに引き継いで、いろいろなホンモロコの可能性を広げてくれる一、二年生が出てほしいと思います。



(写真2) 埼玉県で使用している
キンラン



(写真3) 滋賀県の採卵法



(写真4) マコモダケ